

平成 28 年 4 月 1 2 日

南の風 179

南部ミニバスケットボール連盟
会 長 藤原 敬一

大塚氏の「サカイク」の引用を続けます。

「うちの子にはまだ早いかも」「どうせそこまでの選手にはなれないから」「プロなんてムリ、ムリ」自分の子どものことは自分が一番よく知っている。サッカーに限らず、私たち大人は知らず知らずのうちに子どもたちの限界を決めつけ、成長を妨げている可能性があります。もちろん、サッカーでプロ選手になるのは狭き門。すべての子どもたちが思い通りの道を歩めるわけではありません。反対に、「絶対にプロの選手になるのよ」「これだけ一生懸命協力しているんだから」などといった過度の期待にがんじがらめになっている子どもも少なくありません。

こうした子どもたちは「期待されない」、「期待されすぎ」という両極端な状態にあります。どちらも心に重い鎖を付けられた不自由な状態でサッカーをしなければいけません。

以上引用でした。上記のような状態から子どもたちを解放するためには、「5つの自由」が必要と大塚氏は言います。

- 1 夢を持つ自由
- 2 子どもでいる自由
- 3 自分で決める自由
- 4 才能を伸ばす自由
- 5 失敗する自由

まず1については、子どもたちには、「・・・のようにになりたい」「・・・でプレーしたい」といった、夢を持つ自由があるということです。周りの大人が、その夢を笑ったり否定したりすることは、子どもたちの夢を奪うことに繋がるのです。もちろん「それに伴う努力」が必要になることは当然のことです。しかし、まずは「夢を持つ」ことがすべての始まりだと大塚氏は言います。

2について大塚氏は、「子どもは小さい大人ではありません」と言います。子どもと接する時に気を付けなければいけないことは、身体の作り、経験、使う言葉、見ている世界が違うということです。大人が言ったことがすべて伝わるとは限らないのです。さらに大塚氏は、「なんと言われたとおりにできないんだ?」「練習通りにやれ!」とコーチは言うが「わかるように教えていない大人のせい」。試合でできないのも**大人に原因がある**。と言います。

我々バスケットボールの指導者にも通することだと思えます。子どもと話す時、私たちは子供の目線に下りていっているでしょうか?子どもたちの見る世界を想像しているでしょうか?大人の我々の指導から、子どもたちはどんなことを感じ取っているのでしょうか?そして、大塚氏は、子どもたちには大人の顔色を窺ったり、無理に大人の感覚に合わせたりしなくてもいい「子どもでいる自由」があると言います。そしてどんな子どもにも才能が伸びる瞬間は必ず訪れ、その来るべきときに、どんな準備をして臨めるか? その子なりの成長の最大値までのびのび成長できる環境を整えてあげることが、周りの大人たちのできることです。とも言っています。次号に続きます。